C—62　身頃袖ぐり線と上肢の動作域について

昭和女大短大　刑部昭子　○土門悦子

目的　袖山の高さにより袖幅は異なるので用途により袖山の高さを変える。すなわち袖山が高ければ外観は細く美しいが、上肢動作の機能性は劣り、低いとこの逆である。そこで身頃の袖ぐり線を変えたブラウスを試作し、動作時のつり上がりと動作への適合度を従来のブラウスとで比較検討した。

方法　①実験項目　服種はブラウス、袖丈は半袖で袖口寸法は上腕囲＋4cmである。袖山の高さは袂，袂+3，試作袖2種類の4服種、上肢基本動作は、右上肢前方水平上挙、直上上挙、肘を曲げ右指先を左肩にのせ水平に保つ、両上肢前方水平上挙、直上上挙の5動作である。着用評価は1服種5動作の5段階、動作時によるつり上がり測定部位は、前中心、後中心、右脇、左脇胴高の4箇所である。②被験者は成人女子、年令18才、ベルベック示数が標準型で乳頭囲胸囲がほぼ一定の者を選出した。

結果　①製図の検討、被験者間の袂、袂+3の袖下の長さはほぼ同じ、試作袖は0.7～0.9cm差が生じた。袖幅は腕付根囲の太さが異なるため約1cmの差、試作袖は約2～2.5cmの差になった。②動作への適合度、外観からは袂+3＞試作袖＞袂の順で袂の袖には前後袖ぐりの近くに袖山が低いためにおきる斜めじわが生じた。服種に対する被験者間の適合度はほぼ同じで袂＞試作袖＞袂+3で試作袖の袖下の長さ、袖幅による著しい評価の差は見られない。又動作については袂、袂+3はほぼ同じ、試作袖で右上肢直上上挙、両上肢直上上挙に個人差がやゝ見られた。③動作時のつり上がり寸法、動作、服種によって測定部位に個人差が見られ、袂+3＞試作袖＞袂の順のつり上がり寸法であった。